～クワガタと、今日までそして明日から～

習志野クワガタセンター　代表　木村修平

日常の中の些細な出来事が契機となりその後の生きる道が急転する。良くも悪くも、その人生転機の位置に立った時に「気づく」かどうかが大事で、その分岐点に立たされた時、自分にとってよい方を選択できれば・・・。
今、クワガタと共に人生を歩む私の場合、その当時は些細な事であっても、後々思えばとても大きな出来事がいくつかあった。
その出来事を転機に、そしてその度に、**私の人生がずんずんと深くクワガタ淵に浸かっていく**のだ・・・。

～～「クワガタクワジ物語」との出会い～～

上野博物館と御蔵島

元来、ガキの頃からクワガタは好きだったし、クラスに一人くらいはいた「虫博士」ではあった。まあ小学生の低学年の頃は誰もがクワガタやカブトを大好きなのが普通だが、私の場合、８歳までに親が**当局へ２度の捜索願いの提出はいづれも森へ昆虫採集**に行って夜の８時を回っても帰らずというムシ馬鹿っぷり、５年生くらいになると、やれ野球だ習い事だと多くの少年達がムシから卒業していくのもごく一般的で、さらに中学になると、部活、勉強、そして多少の羞恥心も加味され、ムシ友は激減する。私の地元、千葉県船橋市は当時次々と宅地造成や土地開発で里山が削られ、中学生の採集エリアなどたかが知れたもの、いい意味でクワガタに対する「飢え」があった。
そんな時代背景の中、あれは小学５年生の頃、たまたま本屋で見つけた１冊の本。**「クワガタクワジ物語」**というタイトルに、クワガタに「飢え」ている少年は即座に反応し、誰かに買われてしまうのが怖くて参考書のコーナーにその燦然と輝くタイトルの児童文庫っぽい本を隠し、後日、断腸の思いで大好きな少年チャンピオンと少年マガジンを我慢してその本を買った。
胸の高鳴りとともに開いたその物語は、クワガタが大好きだがまだ自分で採った事の無い少年が、６月のある日、初めて３頭のコクワを採集し、３年にわたるその飼育記を中心に、夏の夜のクワガタ採集やミヤマやオオクワとの出会い、またお母さんの病気などのドラマの中で少年が成長していく様を、やはり市街化が進む武蔵野の郊外を舞台にその少年のお母さんが記したノンフクションだった。その物語の中に、当時の私には大きな２つの衝撃があった。
ひとつは、少年とお母さんが、上野博物館に世界の昆虫を見に行くシーンの中。もちろん標本だが、オウゴンオニやヘラクレスが出てくる。
「上野に行けばオウゴンオニが見れる！」もうそれだけで当時 5 年生の私はいても立ってもいられず、その週末、上野博物館にひとり、電車に乗って出かけた。対応してくれた先生は、千葉からクワガタの標本を見に一人で小学生が来たことにいたく感動してくれて、たくさんの標本を見せてくれた。それは引き出しのような箱に並んでいて、その**次々と引き出される宝石箱にはこの世のものとは思えないクワガタ、カブト達がきれいに並んでいた。先生は、「木村君、僕の仕事はね、世界中の昆虫標本を集めて分類する仕事なんだよ。将来は僕の仕事のお手伝いをしてほしいなぁ。」その、博物館の方のなにげない一言、その衝撃は、夢中になりそうだった野球への思いなど屁でもないくらい、また電車賃と入場料をお年玉で割ると何回来れるか？などと本気で考える程の威力があり、「大好きな虫を仕事にできるんだ！」という大発見、少年は、その時点で、あ、これは人生航海の指針の転機だ、と「気づいた」のだ。**

また、「クワガタクワジ物語」には、もうひとつの衝撃があった。それは、物語の中

の少年とお母さんが、博物館でみたミクラミヤマクワガタの標本の現物を見に、実際に御蔵島に行ってしまうというすんげー展開で、これはもう絶対後々の採集熱の発端であることは間違いない。

・・・で、当然というか唖然というか、当時の私は「**御蔵島にクワガタ採りに行く～！**」とダダこねたわけだが・・・まさか 10 歳の息子を一人でそんなワケワカラン辺鄙な島に、しかも滞在で虫採りに行かせるなんて、そりゃどこの親も認めませんよね。・・・で、あまりに私がシツコイから、親も根負け、中学２年になったら行かせる、という条件でその件はとりあえず一件落着したのだが・・・もちろん、親としては、**中学２年にもなればこのアホ息子もいい加減ムシは卒業してるだろう、と考えてのことだ。**

で、ノコとコクワばかりつかまえながら月日は流れて中学２年の夏。やはり両親は「何が何でもゼッタイダメ！！」・・・だが、５年生から御蔵島へ一人で行くためにコツコツ貯金をしていた私を見て、祖母が味方してくれた。「まあ熊や虎はおらんのなら（笑）いいんでないかね、約束したなら守れ。」と両親を落としてくれた。そして、私の貯金では足りなかった旅費を、祖母が出してくれ、**中学２年の夏休み、私は単身で御蔵島にミクラミヤマクワガタ採集に出かけた。**初めての夜汽車どころか夜船、初めての一人旅、初めての島・・・竹島桟橋を出港、東海汽船の一番安い船室で、ただでさえ不安で一杯なのに酔って吐いた人のゲロがこっちに流れてきたりして、**うわぁ、オレのリュックにつく！**・・・泣きたくなるような寂寥の中、夜明けとともに島に着き、宿の人に迎えに来てもらい、そして宿へ・・・そこで思いもしなかったツライ展開を迎えることになる・・・。

宿の息子、多分当時高校生くらいだったと思う。彼はたまたま昆虫や生き物が好きらしく、ミクラミヤマを知っていた。

「**ミクラミヤマクワガタ？夏休みにはもういないよ**、５月から６月だよ。その頃ならたくさん、道を歩いてるよ。」

・　・・そんなぁ、８月にクワガタがいない？

そんなのアリか！？アタマが真っ白になって、悲しみ、祖母への思い、不安・・・いろいろなものが溢れてきて、こみあげて思わず泣いてしまった。

クワガタの発生が夏休みではないなんて・・・誰のせいでもない、自分の下調べが甘かったのだ。けれど、誰が 14 歳の少年の下調べが甘いなどと責められようか・・・。
滞在は２日。どうしても諦めきれない。さっそく宿で地図をもらい、ミクラミヤマクワガタを採りに出かけた.
宿のお兄さんも付いて来てくれたが、２０分もしないうちに「やっぱいねえや、オレ帰るわ。」

孤独の中で、ひとり藪に入っていく。「ここは坪井の森、いつもノコギリ採ってる森だ、怖くない、怖くなんかない・・・」と自分に言い聞かせ、恐怖を打ち消してクワガタが集まりそうな樹を見ていく。しかし・・・何もいない。数頭のカミキリのみだ。

夜、街灯まわりをしようと思ったが、親が宿に「夜は宿から出さないでほしい」と伝えていたようで、残念ながら宿から外に出してもらえなかった。もっともミクラミヤマが飛ばないこともその時点では知らなかったのだが・・・。
次の日も一人で歩き回ったが、残念ながら成果はなかった。
失意のままに、御蔵島を後にした１４歳の夏。それでも、帰りの船の中では、少し成長したような気になった自分がいた。
そして、翌年。想いは振り切れず、**１５歳のゴールデンウィークに、もう一度、私は単独で御蔵島に渡る。中学３年といえば、受験である。**
親が突きつけた難題は、２学年期末テスト、クラスで５番以内・・・今思えばなんという親だろうか、子どものピュアなクワガタへの情熱を、勉強させる方向へ強引に向けるなんて！（笑）・・・まあ、そのおかげもあって生まれて初めて「集中して勉強する」事を覚え、その後それなりに有効で、やはりそれも親の、というよりはクワガタのおかげだな。
・・・で、がんばって勉強して見事リベンジ in 御蔵島、今度は発生時期の５月に竹芝桟橋を出港だぜ！！
さすがに２度目ともなると気持ちに余裕がでるもので、そうなると海、鳥、トビウオ、島、空、星・・・すべてが輝いて見えるのが不思議だ。御蔵島に着き、防波堤に降り立つと、ふーっと深呼吸をして、宿よりまず森の中だ。今回はいろいろ下調べをして、自信がある。ミクラミヤマの生態や採集法でお世話になったのは、もちろん博物館の先生だ。
半信半疑だけど、先生の言うとおり、竹やぶを探す。
・・・採れましたよ、ミクラミヤマ！道を歩いているじゃん！まるで古代からそのままのような森の中で、竹やぶの中で、倒木を起こしたり、落ち葉をどかしたりすると・・・
いるいるいる！！！！
２年分のモヤモヤが一瞬にして浄化されて、誰もいない森で叫んでしまったよ。

うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお～～～～っ！！！！！！！！！

みっ・くっ・らっ・み・や・まぁ～～～～～～っ！！！！

あの小さな小さなクワガタとの出会ったあの瞬間が、中学時代では、好きな女の子に告白して OK もらった時に次ぐ最高の瞬間だったなぁ（笑）。**「クワガタクワジ物語」は絶版となっていたが、少し前、10 年以上の時を経て再版となり、今、本屋で買えます！ぜひご購読を！**

～～佐藤のおっちゃんとの出会い～～

オオクワガタ採集

そして高校生。もちろん所属は生物部。**私が部長となり主導権を取れる立場になった瞬間から、あっという間に生物準備室はクワガタ達とその幼虫で埋まることになる。**そのどう見ても個人的な悦でしかない状況を黙認してくれた生物のハト先生は、私の本当の意味での恩師であり、後々、結婚式でも主賓として招いた。今でもマブダチだ。まだ菌糸ビンなどない時代、クヌギの朽木をほぐしてタッパーやシャレーに詰めてノコギリ、コクワガタを羽化させていた。

千葉県はバイク免許取得は**即停学もしくは退学**だが、私は**住所を都内に移して免許を取るという裏ワザ**を使い、バイクを乗り回しクワガタ採集の行動範囲が圧倒的に広まっていった。何度もケーサツに深夜徘徊でガンカケ（職務質問）食らった。そりゃわからんでもない、パーマグリグリの高校生がバイクで深夜ウロウロしてればとりあえず声かけるよね、しかも**持ってる物が、懐中電灯にペンライト、マイナスドライバー、ピンセット、時にはマイルドセブン・・・**この上なく怪しい若者だよね、私はその頃すでに両親と離れて一人暮らしをしていたので、そのたびに船橋東署からハト先生に連絡が行き、私は開放されるのだ（笑）。

そして高２の６月、白井の森の中の大クヌギで、船橋で居酒屋をやっている「佐藤のおっちゃん」と出会った。

いつもばったり「洞（ほら）の樹」で遭遇するのがオオクワ狙いの佐藤さんだった。

私は当時、バイクしかないので、縄梯子と腕力で樹に登ったが（当時 58Ｋｇだよ（笑））、佐藤のおっちゃんは軽トラに職人用のスルスルと伸びる長い梯子を積んで深夜の森に出動していた。

私がまだ偶然でしかオオクワを採った事がない頃、何回か森で会ったあと、「あんちゃん、ラーメンでも食おうや。」と声をかけられ、16号沿いの赤ちょうちんで初めてのホッピー、「あんちゃん、こういうの採らなきゃよ。」そこで佐藤さんに自慢げに見せられたそのクワガタは、中歯ではあっても明らかなオオクワガタだった。

オオクワは樹の高いところの洞にいること、千葉でも存在していること、真夏の前に採ることなど、佐藤のおっちゃんに教わった。

一概に「森」といっても、どこの森や山にでもオオクワが生息しているわけではない。かなり広範囲にクヌギ林を中心に巡る。コナラやカシ、ニレケヤキなどの林立する雑木林、ときには民家の裏の大クヌギなどまで、私たちは1本1本の樹を見て、オオクワガタが棲める「洞（ほら）の樹」を探して徘徊していた。

いいトシしたオトナがクワガタ採集など、当時は世間的には認められることはありえなかった。もっとも今だって、私達の仲間は「オトナ」という概念に埋もれて今まで覚醒できなかった同志がぽつぽつと出現してきた異端集団に過ぎないのではあるが･･･。

その頃、私と佐藤のおっちゃんの採集エリアは船橋北部･八千代･白井とほぼ同じだったため、5 月から 7 月頃の採集シーズンには、山の中で数ある「洞の樹」でばったり、となるわけで･･･なにせ深夜の森の中、これは相当に寂しく、ちょっとでもクワガタ採集から神経をそらすと、とてもじゃないが得体の知れない恐怖概念に襲われるものだ。だから、お互いにライバルでありながらも、クワガタに出会えない寂しげな夜など妙に孤独感に苛まれ、今夜はおっちゃん来てるのかなぁ？なんて気になったりしたものだ。それでも一緒には行動しない。なぜなら**「どっちが先にウロを見るか」が常に微妙になってしまうから。**

余談だが、深夜、森の中で木から下がる人間にまともに懐中電灯を向けてしまう恐怖を想像して欲しい。何せ 30 分も走れば首都圏住宅街、世に未練のなくなった方々がそういうことをする場所には向いている場所、といえる。私もおっちゃんも、**そんな遭遇体験は1度じゃ済まない。**

オオクワガタ棲息の可能性のある「洞の樹」を、私は30本程探した。おっちゃんは多分、70本は持っていただろう。そのうち、お互いで共有していたのが 20 本くらい。（「持っていた」というのは別にその樹の所有者というのではなく、単に「知っていた」ということだ）

単純に「洞」のある樹は腐るほど存在しているのだが、オオクワの棲む洞はちょっと違う。
そのほとんどが、大木のクヌギやクリ、ニレケヤキなどの上部にあるのだ。
漆黒の森の中、懐中電灯の照らし方で、私とおっちゃんはお互いを遠方から確認できる。
お互い、照らす場所に無駄がないのだ。何百もの樹や障害物がある夜の森で、明かりを使うのはほんの少しだけ。
「洞の樹」までの、いわゆる“けもの道”を直線的に照らし、樹に登るときには光量の弱いペンライトをそっと使うのだ。
必要な場所に、必要なだけ、明かりを照らす。人間の気配は消す。そうでなければ、オオクワは採れない。
「おう、今夜はいい按配だから来ると思ってたよ。八幡（神社）は行ったぁ？」
と梯子の上からペンライトの明かりで浮かび上がるおっちゃん。蒸し暑くて無風、前日が雨だったりすると、樹液の噴出しがよくでクワガタ採集には絶好なのだ。
「うん、行った。でも1の樹も2の樹もコクワしか入ってなかったねぇ、奥の御神木には中歯の♂がいたけど、掻きだせなかったよ。」
「ああ、あの左前の欠けた♂か。あれは出てこないな。あの洞はしばらく休ませたほうがいいかもなぁ。」
大体、広範囲ポイント1箇所につき数本の「洞の樹」がある。**“御神木”というのは、その中でも大体いつもオオクワが入っている最高の「洞の樹」のことだ。**不思議と、いい樹の洞には、採ってもすぐに次の個体が入る。その洞に隠れているオオクワを見つけたら、自転車のスポークの先をかぎ状に曲げたものをそっとオオクワに触れないように洞に入れ、スポークの曲がった先をオオクワのお尻にあて、ちょんちょんとつつく。オオクワにしてみれば、洞の奥から突付かれたような感じになるので、びっくりして穴から這い出してくる、という算段だ。しかし、元々繊細で慎重でこの上なく臆病なオオクワは、人間の気配や危険を察知すると、スルスルっと洞の奥深くに入り込み、そうなると最低2日は洞の奥から出てこない。だから、その洞にいることはわかっていても採れない、そんなオオクワとのファイトも私たちの楽しみのひとつだ。そして、採れるオオクワの 95%は「中歯（ちゅうし）」と呼ばれる、40～55mm程度の小型個体である。大アゴ内側の突起歯の出る位置が付け根に近く、突起歯は横を向く。その形が中歯。私たちのあこがれる大歯（たいし）のオオクワは、サイズなら60mm以上、内側の突起歯の出る位置はより大アゴの先端に近くなり、突起歯はグッと上を向く。
菌糸ビン飼育で70mmUPが楽に出せる今では中歯のオオクワなどまず見かけなくなったが、当時は60mmUP、しかも大歯なんて個体を採集しようものならあまりの興奮で3日はまともに寝付けないほどだった。（余計なお世話だが、**最近の採集記を見ているといともたやすく70ＵＰのオオクワが採れているのがほんっとにワカラナイ、千葉だけ小さいのか～！？（笑）**）
「・・・それより、西高校裏の3本クヌギ、スモークやられてたよ・・・。」
「そうか・・・採りゃいいってもんじゃねえよなぁ。」
寂しそうに言っておっちゃんはいかにも元職人らしい軽いフットワークでタタンと梯子から降りてきた。
スモークとはつまり煙である。当時（今もあるのかもしれないが）、煙幕というカラーの煙が噴出す花火があり、心無い採集者はその煙幕の煙を洞の中に流し込むのである。そうなると中のクワガタはたまったもんじゃない、たちまち呼吸困難に陥り、慌てて棲家である洞から這い出すしかないのである。そして一度煙幕を吹かれた洞は、黒緑に変色して乾き、オオクワの棲家としてはまず再生できない、死んだ洞になってしまうのだ。
そんな輩がいたからこそ、私たちはポイントを守った。だから、**人目につく昼間は「洞の樹」には近づかなかった**のだ。
「・・・じゃあ俺は谷津田のコナラに廻るから、おまえさんは梨畑裏の腰曲がりあたり攻めたらどうだい？」
「うん、そうする。明日あたりは白井あたりで会いそうだね。」
「・・・だな。ああ、そうだ。競馬学校の横の二股洞、前向いてるの（大歯個体のこと）残ってるぞ。そろそろ出てきてもいい頃だ。」
「ありがとう。今年はまだ大歯採ってないから、ありがたいや！」
懐中電灯の明かりだけがちらちらと見え隠れして、二人は少しの安堵を胸に溜めて、それぞれの次の場所へ向かって森の中で分かれる・・・。その頃、友達のひとりは甲子園目指し白球を追い、友達のひとりは税理士を目指し図書館にこもり、友達のひとりはアイドルを追い掛け回し、友達のひとりはバイクで逝き、そして私はクワガタを追い求めた。

～～濱田のジイサンとの出会い～～

画期的な飼育法

高校を卒業した頃だったろうか、四街道（よつかいどう）という少し離れた田舎町（四街道市民の皆様ゴメンナサイ）の森の中で、クワガタを採集するジイサンと出会った。
「クワガタ好きならおらの家来るべよ、飼育場見てけよ、どうせヒマだっぺよ。」・・・あんたほどヒマじゃねえよ、なんて思いながらも千葉弁まるだしのそのジイサンに興味を持った。なんというか、70くらいのジイサンがクワガタを採集してるというシュチュエーションが不思議な感じがして、四街道の国道沿いの林の中にある彼の飼育場（飼育場！？なに大げさなこといってんだよジジイ！と思いながらも）について行った。
驚いた。
かなり驚いたよ。
マジでびっくらこいた。
それは確かに、飼育場だった。
林の小道ちょうど小学校の飼育小屋みたいな網小屋が並び、各小屋でクワガタの飼育をしていた。
入ってすぐの事務所兼ブリードルーム的な部屋では、幼虫飼育をしていた。
幼虫の飼育も画期的だった。ガラス瓶に粉砕マットをスリコギ棒で硬く詰めて幼虫を飼育していた。私のタッパーでの飼育とは大きな差があった。もうひとつ驚いたのは、**クヌギよりもエノキの朽木を多用していた点、その時点では成虫がつかないエノキでクワガタの幼虫が育つなんて私は考えもしなかったのだ。**
また、材の中で羽化させる材飼育でも感服した。材を、川砂に埋めてあるのだ。なるほど、これなら幼虫は材から出ない。成虫も、ウロのある材を入れて、いわゆるマット部分に川砂を使用している。これなら、クワガタはずっと材の中にいて、無駄な体力を消耗しないという。・・・あらゆる面で目からウロコ、しばらくそのジイサン、濱田さんの飼育場に通う日が続いた。濱田さんの飼育場で、本格的にクワガタが好きな先輩の方々と出会い、知識も経験も成長した。余談だが、濱田のジイサン、後日、調子こいて借金してクワガタ飼育本などを出版してしまい、予想通りか反してか，飼育室には在庫と返本の山、山、山・・・。で、常連に本の購入を強引に付き合わせるという横暴に出て、私はいろいろ教わった弱みもあり、50冊もお付き合いしました、ハイ・・・。内容は、当時としてはかなりスバラシイものだったのですが、いかんせんクワガタを飼育しようなんて人間は当時ほっとんど世間には存在しませんでしたからねぇ。そんなジイサンも数年前、逝ってしまいました。**ありがとう、ジイサン！パラワンヒラタやアンタエウス、メタリフェル、ニジイロ、メンガタ・・・ジイサンに見せてあげたかったなぁ・・・。**

～～商売と博打～～

花屋順調も競馬で大放出（笑）

で、とりあえず大学へ。行きたかった農獣医学部を金銭的な側面から断念、飯田橋にある靖国神社とお掘の間にある大学の日本文学科に入学して、ヒマなもんだから大学在学中に花を扱う会社を作った。それが今の（有）花駿である。
高校時代から２０以上のアルバイトを体験し、その中で一番好きだったのが釣具屋と花屋だった。元々、植物や花が好きとかではなく、**「キボシカミキリはイチジク」とか「アゲハはサンショウ」「クワガタはクヌギ、コナラ」という感じで、すべて昆虫との関連で植物を自然に覚えていった。昆虫図鑑からもイボタ**

ガという昆虫名から、イボタという植物を、ハンノキカミキリからハンノキを覚えることもある。昆虫図鑑の次に植物図鑑はボロボロになった。数多のバイトを経験し、その中で花屋なら自分でできそうだな、と考えた。なんせ**バケツと花と水があれば免許も認可もなく始められる**しね。市場でセリを覚え、バイト先で技術を会得し、繁華街の路上でヤクザに追われながら花を売った。**市場でセリをして、その日のうちに繁華街の路上で安価でロスなく売り切る。なにせ新鮮な花を安く売るから、よく売れる。**また、フラワーデザイナーとして、レストランや美容室、ブティックなどに花を活けて回っていた。景気がよかったこともあり、商売はとんとんと登り、大学２年、20 歳で稲毛の商店街に 9 坪の店を借りた。23 歳でイトーヨーカドーに数店舗出店し、商売は順調だった。銭がついてくるもんだから、大学なんてアホらしくて行ってらんない。大学には金も払わず、まったく行かなくなった。
毎日、ブテッィクや美容室のオーナー、ヨーカドーの専門店のオーナーや店長たちと飲み歩いていた。週末は、毎週競馬場へ通った。飲まない夜は、フリー雀荘で夜通し打ちつづけた。銭は稼いだ分、全部使った。ちなみに私の HN「ヘリオス」は、当時、大好きだったホクトヘリオスという馬からだ。彼はデビューから華々しく活躍し、後のダービー馬メリーナイスと３歳チャンプを争った。しかし一番重要な４歳の時期、スランプに陥る・・・どんな一流騎手が騎乗してもゼンゼン走らない。騎手にも、オーナーにも、厩舎にも、ある意味で見捨てられた彼は、見習いの新人騎手があてがわれ、人気皆無で格下のレースに出走し、そこで最後方から怒涛の追い込みで２着に復活、その後もずっとその見習い騎手とのパートナーで走り続ける。毎回、ドンケツから大外に持ち出し、ぐんぐん先頭と差を詰める。しかしどうしてもあと少し届かず、２着、３着・・・そんな勝てないけど走る彼に惚れ、追い続けた。福島競馬場、京都競馬場まで彼の勇姿を追った。今や関東のトップジョッキーである柴田善臣は、見習い騎手時代にホクトヘリオスと「出会い」、その素質が開花し、現在の彼が存在している。
それた話を戻そう（笑)。後から判明したことだが、こんなヤクザな日々は続かない、いつかもう一度、大学に戻りたくなる日が来るだろう、私の母はそう思い、私の復学を願い、休学扱いにして金を数年にわたり支払っていた。感謝だね。・・・結局無駄にしてごめん、かーちゃん。

〜〜初めてのサキシマヒラタ〜〜

クワガタでメシ食えるかも！？

そんなある日、たまたま埼玉県嵐山町の親戚の家に行ったとき、**路際の電柱広告に「オオクワ・オオヒラタ」の文字が！！**当然、親戚の家に行くことなど忘れて愛車 117 クーペは看板の指す場所へ。
「虫研」というその店、というより家へ行き、代表の吉田さんにクワガタを見せてもらった。そこで初めて、南西諸島のヒラタと出会い、ものすごい衝撃を受けた。標本ではなく、**生きたビッグクワガタだ。乗せた右手が震えた。**サキシマヒラタというその大きなヒラタクワガタを数ペア購入して、大変オイソガ氏の吉田さんに迷惑も顧みず数々の武勇伝を聞きまくり、そしてなによりグッときたのは虫研の前にＢMW。
「おお、クワガタでＢMW乗ってるぜよ！」
もしかして、クワガタでメシ食えるかも！？そんな思いがふつふつと噴出してくる。
嵐山町で、また、「気づいて」しまい、違う意味でのクワガタ熱がさらにヒートアップしたのは言うまでもない。
さらに、そこで「山梨はオオクワ天国」との情報を得て、翌週には韮崎近辺へ車を飛ばした。
・・・唖然。
ここにオオクワがいないなら、日本中どこ探してもオオクワなんかいないだろう。
そんな思いにとらわれるほど、韮崎付近はウロのある台場仕立てのうねったヨダレの出るようなクヌギ・

クヌギ・クヌギ・・・畑の脇でも、道沿いでも、山に入っても、民家の庭にも、クヌギ・クヌギ・クヌギ・・・
千葉では 100 本に１本しかないような美味なクヌギが、どこにでもある！
毎週のように山梨に通う日々が１年は続いただろうか。
一緒に山梨に行こうと思って、久しぶりにオオクワ採り仲間の佐藤のおっちゃんの居酒屋に行くと、店は消えていて、となりのタバコ屋のおばちゃんに佐藤さんが夜逃げしたことを聞かされた。

そんな山梨のクヌギも、心ない採集者のスモークにやられて数年前からオオクワガタの姿は皆無である。
また、加えて採集者の増加により、最近ではノコギリもミヤマも見かけないらしい。

〜〜ヒメオオとの出会い〜〜

桧枝岐、そこは天国だった

その頃、仲のよかった高校時代の女友達が結婚して、旦那を紹介したいと私の家に連れて来た。その旦那、オリさんは、私の家に来てすぐ、クンクン・・・
「この家、ムシ飼ってない？」
初対面で、なんという一言だよ（笑）。
「えっ、オリさん、もしかしてムシ好き？」
「うん、オレ蝶屋が専門だけど、糞虫とオサムシも。」とオリさん。（ここで言う「蝶屋」とは、別に蝶を売っているわけではなく、蝶を集める人なら蝶屋、カミキリを集める人ならカミキリ屋と呼ぶのだ）
自分はクワガタ屋専門であることを話し、ブリードルームへ案内し、私は当時出回り始めていた菌糸ビン（ちなみに当時の菌糸ビン、850 のＰＰボトルで１本￥３０００！カワラタケで死亡率激高、でも夢の７０オーバーのオオクワが期待できた！）の解説などして、オリさんは千葉の幻のゲンゴロウ、シャープゲンゴロウモドキを追っていることなど、たまたまオリさんと私がガキの頃同じ町に住んでいたことも判明、お互い今昔のムシ話を熱く語ってしまった。
「来週、蝶屋やカミキリ屋、クワガタ屋たちと桧枝岐に行くけど、行く？ヒメオオクワがメインだぜ。」とオリさん。
「ヒメオオ！？行くよ、行く行く！！絶対行く！」
おお、ヒメオオクワガタ！私が一番憧れているクワガタではないか！
ヒメオオは、それまでも何度かチャレンジしたのだが、今まで一度も採集できたことはなかったのだ。ヒノエマタというその聞きなれない場所が日本のどこなのかさっぱりワカラナイが、どうやらヒノエマタにはヒメオオがいるらしい。
セミの声も途絶える９月の初旬、私達は福島の秘境、桧枝岐へ向かった。
オリさん以外は初めて会う面々で多少の不安もあったので、私も一緒に高校時代からの親友、克巳を連れて行った。当時彼はイトーヨーカドーに勤務していて、ムシなどまったく興味がなく、ただ「ヒマだから」という理由で着いて来た。**・・・まさかその１０年後、自分が「船橋クワガタマーッケット」の店長をやるなど夢にも思っていなかっただろうが（笑）。**
２１：００、ムシ馬鹿５人とヒマ人１名を乗せたタウンエースは、首都高から東北道へ。西那須野インターを降りて、もうかれこれ２時間だ。途中、灯下で寄り道をしながら目的地に向かうため、なかなか車は進まない。あきれるような時間と距離の中で、車内での喧騒は日本語ではあるがまるで異国の会話だろう。ミヤマの歯形の地域的差違やミヤマカミキリの増殖やらヒヌマイトトンボがどうしただのウバタマムシはどこへ行ったとか新種のシジミがなんだとか・・・

ムシを好きなオトナである自分に対して、どこかうしろめたい感覚があったのだが、この日、それは完全に払拭された。
ひとつだけ、決定的な彼らと自分との違いがあった。それは、彼らは皆、基本的に「標本を集める」昆虫マニアであるのに対し、私は、標本にすること自体に興味がなく、「生きてなきゃダメ」という点である。彼らは私に、「へぇ、生き虫屋なんだぁ、珍しいね。」と言った。その「生き虫屋」という不思議なフレーズは、あたりまえだと思っていたものが異端とされて違和感を感じながらも、自分らしいよな、と、満更でもない気分であった。
車内の面々はどの方も知識、経験ともに私のそれを圧倒していた。その中でも特に、虫の中でも特にクワガタが一番好きという田中さんは、博物館の先生の比じゃなくクワガタを中心に昆虫全般のスペシャリストで、あぁ、この人の話をずっと聞いていたいよ、と思うほどの博識家だった。私が虫博士なら田中さんはノーベル昆虫賞受賞者だな（笑）。
オオクワ灯火ポイントを回りながら、夜明け前に車は桧枝岐に着いた。ヒメオオは昼行性なので、日が昇るまで、車内で仮眠を取り、９：００頃から採集開始だ。
桧枝岐、そこはブナの原生林に神様が道を通したような、神聖で圧倒的な自然のパワーはどんな人間をも自分を小さい存在に感じざるを得ない場所だった。
車がギリギリすれ違える程度の国道沿いのヤナギを、車に乗ったまま見上げる。果てしなく、青く澄んで高い空に、ヤナギの枝を透かして見ると、ポツンと黒い影が違和感となって現れる。
それが、ヒメオオかアカアシだ。
サンルーフから身を乗り出し、ロングネットを伸ばす。
今では考えられないが、当時は、採れ過ぎるから、という理由で林道には入らず、国道沿い、しかも車内からのルッキングで十分、ヒメオオ採集を堪能できた。まさにそこは、ヒメオオの楽園、私には理想郷であった。
あれから15年。桧枝岐の今の惨状に、いろいろな観点から私達は多大なる責任を感じなければならない･･･。
帰路の車内で、外国産のクワガタがこっそり日本で飼育されているという信じられない情報を耳にして、私は俄然熱くなった。コーカサスやオオヒラタが、国内ですでに密かに飼育されているというではないか！これは絶対ブームが来る！！
普通にヘラクレスやミナミオオクワ（アンテのこと。当時は皆、そう呼んだ。）が飼育される時代が来る！！
車内の会話から、その時代が来ることに、私はまたしても「気づいて」しまった。
もうこれは、「月刊むし」を超越して一般人の遊びとして定着する自信があった。
なぜなら、飼育も採集も、こんなに楽しいんだから！それにもしかして、外国産が加わったりしたら･･･！
私は田中さんに、「生き虫専門のクワガタ屋始めようと思う」と言い、次の日、ＮＴＴの電話帳に、「習志野クワガタ」で登録する。
次号の電話帳に、初めて、「昆虫類」という分類が始めて登場する。今から１５年以上前の事だ。

~~外国産の解禁、仲間が集う～～

ＮＫＣ（習志野くわがた倶楽部）発足＆習志野クワガタセンターＯＰＥＮ

時は流れて１９９９年の春頃、一部の方々の努力により、外国産クワガタが解禁されそうだ、という話があった。
当時、現実的にはもう相当数の外国産クワガタが密輸という形で国内に持ち込まれ、飼育され、事実私もすでに相当数の外国産昆虫を飼育していた。解禁前、国内に密輸されてすぐの外国産クワガタに私が払っ

た価格を、公表しちゃおう。
コーカサス　5 万
アトラス　2 万
ヘラクレスリッキー　35 万
タイアンタエウス　5 万
メンガタ　8 万
メタリフェル　2 万
パプキン　2 万
アルキデス　4 万
ミンダナオパリー　6 万
ニジイロ　38 万
インドクルビデンス　25 万
どうです、この価格・・・これを買っちゃうんだから、当時の購入者たちはよほどのクワ馬鹿だよなぁ。
その他なんでも高い、高い、高い・・・！！もう♀が産卵せずに落ちた時なんか、一週間はヘロヘロに落ち込んじゃいますよ。
何人ものクワ馬鹿が、仕事を落とし、家庭を落とし、そして人生までも落としていく・・・老舗といわれる、昔からクワガタ雑誌の広告に載ってるようなクワガタショップはみんなこんな価格でも欲しくて欲しくて入手していたんだから、クワ馬鹿の度合いが違うよね。
なにはともあれ、密輸品である。自営で商売をしている身、やましいことこの上ない（笑）。
経営する花屋の本社・卸部の２階は２５坪のスペースにテーブルを並べ、私がフラワーアレンジメント教室を開催していたのだが、その奥の隅にカーテンで仕切った「奥様・お嬢様は覗いちゃいけない間」があり、そこで国内外の山のような量のクワガタを飼育していた。噂を聞きつけ、虫好きがチラホラと出入りするようになり、そのうち、それなりの香り？も発生してきて、フラワーアレンジの生徒である奥様・お嬢様達に怪しまれるようになった。あのカーテンの奥は何ですの？・・・奥様・お嬢様たちの間では、エロ本とかそういった商品を扱っているとの噂が・・・そりゃそうだ、いい歳こいた怪しげなオトナがニヤニヤしながら嬉しそうに紙袋を持って帰るんだから（笑）。
うわぁ、もう隠しきれんよー、そんな１９９９年１１月、４４種の外国産クワガタ・カブトが解禁になった。
１週間後、店にはデカい看板を取り付た。
「国内外クワガタ・カブト販売　習志野クワガタセンター」
看板を出し、広告を山ほど出し、大勢のお客様がご来店してくれた。
徐々にフラワースクールは先生である私の都合で縮小され、２階のスペースすべてがクワガタになってしまうまでにそう時間はかからなかった。
性格上、クワガタを好きな人とは仲間意識が強く、商売にしきれないという難点がまた有る意味利点にもなり、仲間が増えていった。当時、なんといっても一番人気は、ヒマラヤのアンタエウス。ただ、グッとくる「ホンモノ」にはなかなか出会えなかった。
そんな時、同じ千葉のクワガタ業者、ドルクスマニア氏の自宅で野外自己採集品のヒマラヤアンタエウス・クルビデンスを見て、仲間一同、アタマをガーンと殴られたような感じ、もうなにがなんでも手に入れたいという衝撃・・・**当時、本物のヒマラヤアンテ、１ペア最低 30 万円だ。普通買えねーよ（笑）。それでも私は、ぜんぜん高いと思わずに 15 万の本物のインドクルビを買った。**
しかしナラクワに集い始めたクワ馬鹿軍団、本当にバカである。一人２０万で、５人で１００万。
その１００万で３ペアのチョーカッコエエ、ＷＤアンテを共同購入する。

取れた幼虫を、５人で分けた。たーさん、あの頃の情熱、カムバーック、ザリばっかやってないでさ（笑）！それが、習志野くわがた倶楽部の発足だ。採集会や飼育情報交換、時には宴会・・・仕事や上下関係のない純粋な仲間はほんとうに貴重だと思う。今では会員は 500 人を超えている。
後日、初めてのヒメオオ採集に同行した克巳君も、数年前から花屋スタッフとして私の右腕として加わり、その後、花屋の店舗だった船橋の店を、クワガタショップの２号店「船橋クワガタマーケット」にして、克巳君は花屋の店長からクワガタ屋の店長という、まるで幼虫がクワガタに変態するがごとく、彼は羽化し、ハートでお客様の心を掌握する彼の本領を発揮することになる。昨年、船橋クワガタマーケットは大家さんが建物を建て替えるとのことで閉鎖し、習志野クワガタセンターと合体して、今に至る。
３０年前に「クワガタクワジ物語」と出会い、標本とはいえ外国のクワガタに出会い、２２年前のあの日、あの瞬間、リベンジしてミクラミヤマに出会い、２０年前、オオクワ採りの佐藤のおっちゃんと出会い、飼育の師、ハマダのじいさんと出会う。そして１５年前にヒメオオと出会った。
そして、クワガタ屋を始め、本当に多くのいい出会いがあった。
その出会いと、出会うまでの些細なきっかけとその時点の「気づき」と「決断」のおかげで、今の自分がある。今の仲間がいる。ナラクワで出会った仲間同士が、クワガタの付き合いから仕事に就いたりした縁は、もう２０人以上だ。人生を有意義にするものは、いい出会いだ、というのが私の持論で、常に「出会い・発展・感謝」をモットーに、これからもよい出会いを願って、クワガタと、仲間と、共に楽しく歩きたい、と思う。

~~これから、私たちが考えなければいけないこと～～

ＮＰＯ法人　里山の会　発足

そして、少しでもクワガタの生息できる里山を残すことに自分が役立てれば。
生態系を守るために、外国産クワガタの正しい飼育を伝えなければいけない。
その他にも、昆虫業界団体として正しい方向性を示す活動をすべきことはたくさんあると思う。
そんなことを思い、「くわがたマガジン」の発行者である浦上氏を代表に、フジコンの仲社長らとともに、「ＮＰＯ法人　里山の会」を立ち上げた。里山の会の詳細は別紙にて紹介させていただいていますのでぜひご覧下さい。生態系と自然環境を守るため、また、正しいクワガタ飼育の知識を伝達していくため、みなさまもぜひ参加してください。賛助会員は年会費￥1000 です。よろしくお願いします。